

# 平成 29 年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	指導	題名	しその害虫ウリハムシモドキに対する数種殺虫剤の防除効果		
[要約] ペルメトリン乳剤およびジノテフラン水溶剤は、ウリハムシモドキに対して実用的な防除効果がある。					
キーワード	しそ	ウリハムシモドキ	防除薬剤	環境部 病理昆虫研究室	

## 1 背景とねらい

宮古市川井地区では、地域特産品のしそが栽培されている。現地のしそ栽培で問題となる害虫はウリハムシモドキ *Atrachya menetriesi* であり、本種は卵で越冬し、5月中旬ごろ一斉に孵化する。同時期にしその定植作業が最盛期を迎えるため、定植直後に株が食害を受けて枯死する被害が報告されている。株が消失した部分については手作業で補植するため、農家の金銭的・労力的負担が大きい。しかし、しそに登録のある殺虫剤のうち、本種に適用のある薬剤はないため、現場では防除に苦慮している状況である。そこで、本研究ではウリハムシモドキに対する数種薬剤の防除効果を検討する。

## 2 成果の内容

- (1) 定植直後にペルメトリン乳剤（商品名：アディオン乳剤）、あるいはジノテフラン水溶剤（商品名：アルバリン顆粒水溶剤・スタークル顆粒水溶剤）を茎葉散布すると、ウリハムシモドキ幼虫による被害を抑制することができる（表1）。

## 3 成果活用上の留意事項

- (1) ペルメトリン乳剤は、しそに作物登録があり使用できるが、ウリハムシモドキに適用はない。（平成 29 年 11 月 30 日現在）
- (2) ジノテフラン水溶剤は、しそに作物登録があり、平成 29 年 11 月 22 日付でウリハムシモドキに適用拡大された。
- (3) 薬剤は定植直後の株全体に十分量を散布する。

## 4 成果の活用方法等

- (1) 適用地帯又は対象者等  
県内各地の農業改良普及センターおよび病害虫防除所などの指導機関
- (2) 期待する活用効果  
しそ栽培において、防除計画策定の参考となる。

## 5 当該事項に係る試験研究課題

- (402) 新農薬の効果検定と防除指針作成 [H9-30/民間委託]

## 6 研究担当者

松橋伊織

## 7 参考資料・文献

- (1) 奥ら(1971) 草地におけるウリハムシモドキの密度変動  
I. 草生状態と発生密度の関係 北日本病害虫研究会報 No. 22

## 8 試験成績の概要（具体的なデータ）



図 1 ウリハムシモドキ幼虫(左)、食害を受けたしその葉(右)

表 1 ウリハムシモドキに対する薬効試験

平成28年度 花巻 (薬効試験)

供試薬剤	1区10株 3反復	調査茎数 (本)	30株あたり被害茎葉数		
			処理3日後 (6月8日)	処理8日後 (6月13日)	処理15日後 (6月20日)
アディオ乳剤 4000倍 散布	合計	168	0	1	5
	被害茎葉率 (対無処理比)		0.0 (0.0)	0.6 (2.8)	3.0 (7.7)
アルバリン顆粒水溶剤 3000倍 散布	合計	165	0	2	6
	被害茎葉率 (対無処理比)		0.0 (0.0)	1.2 (5.6)	3.6 (9.2)
無処理	合計	154	8	33	60
	被害茎葉率 (対無処理比)		5.2 (100)	21.4 (100)	39.0 (100)

平成29年度 花巻 (薬効試験)

供試薬剤	1区10株 3反復	調査茎数 (本)	30株あたり被害茎葉数		
			処理3日後 (5月31日)	処理7日後 (6月4日)	処理14日後 (6月11日)
アディオ乳剤 4000倍 散布	合計	160	2	14	17
	被害茎葉率 (対無処理比)		1.3 (4.3)	8.8 (18.4)	10.6 (18.0)
アルバリン顆粒水溶剤 3000倍 散布	合計	149	4	7	38
	被害茎葉率 (対無処理比)		2.7 (8.9)	4.7 (9.8)	25.5 (43.2)
無処理	合計	161	49	77	95
	被害茎葉率 (対無処理比)		30.4 (100)	47.8 (100)	59.0 (100)

平成29年度 川井 (薬効試験)

供試薬剤	1区20株 3反復	調査茎数 (本)	60株あたり被害茎葉数		
			処理3日後 (5月26日)	処理7日後 (5月30日)	処理14日後 (6月6日)
アディオ乳剤 4000倍 散布	合計	247	0	1	4
	被害茎葉率 (対無処理比)		0 (0.0)	0.4 (8.2)	1.6 (11.4)
アルバリン顆粒水溶剤 3000倍 散布	合計	256	5	7	13
	被害茎葉率 (対無処理比)		2.0 (80.0)	2.7 (55.1)	5.1 (36.4)
無処理	合計	243	6	12	34
	被害茎葉率 (対無処理比)		2.5 (100)	4.9 (100)	14.0 (100)

### 表 1 摘要

各年とも、定植直後のしそに所定濃度の各供試薬剤をハンドスプレーを用いて十分量散布した。1区10～20株の3反復とし、各調査日毎に全茎葉における食害の有無を見取り調査し、被害茎葉率を算出した。薬剤処理に対する降雨の影響はなかった。